

『東方』二七九号より

現代の仙人と

中国古代の生物観

川原 秀城（東京大学）

「ところで雁の四徳って知ってますか」。小林清市君の静かな声が聞こえる。「李時珍の『本草綱目』に、雁には四徳がある。寒ければ北から南へむかい、熱ければ南から北にむかう、これが信である。飛ぶときには行列の秩序があり、前のものが鳴けば後のものが唱和する、これが礼である。配偶者を失えば、ふたたび配偶しない、これが節である。夜には群れのまま宿り、一羽が巡警する、昼には蘆をくわえて鳥網を避ける、これが智である、とあるでしょう。あれですよ」（詳しくは、本書頁三八二以下を参照されたい）。著者のはにかんだような笑顔がみえる。

良書に接したとき、あるいは一冊の本を読みあげて心からよかったと感じたとき、不思議な感覚におそわれたり独特な心理状態になった経験をおもちのかたもさだめ多いことであろう。わたしも時折それがおこる。恩師の藪内清先生や湯浅幸孫先生の著書を読んだときには、身が引き締まる思いがするし、本田済先生の文章を読んだときには、中国研究を志してよかったと幸せな気持ちになる。山田慶兒先生や木下鉄矢氏の文章を読んだときには、なぜかわからぬがこれらの独特の字体（筆記体）が思い浮かぶ。だが今回、小林君の著書を読んで脳裏に浮かんしたのは、学部学生時代のかれの面影である。まるで仙人のように無欲に語りかけるその姿が……。

小林清市著

『中国博物学の世界』

——「南方草木状」「齐民要術」を中心に——

A5判・四四四頁・農山漁村文化協会・六、八〇〇円



本書は、四七歳でこの世を去った奇才、小林清市君（一九四九—一九七）の遺稿を集成したものである。目次を記せば――。

第一部 『南方草木状』の研究

『南方草木状』（訳注）

『南方草木状』（影印版）

『南方草木状』解題（櫻井謙介）

『本草綱目』の記載方法にかんする一試論

第二部 『齐民要術』の世界

『齐民要術』における五穀と五木

『齐民要術』にみる醸造の呪術

『齐民要術』の求めた味

『齐民要術』のなかの家畜の病

第三部 中国博物学縦覧

陸疏の素描

虎豹を食う怪樹の話

清朝考証学派の博物学

経学者の昆虫観

魏・晋時代の蟬

中国古代の昆虫観

雁の四徳について

本書は大きく三部にわかれ、第一部の『南方草木状』と第二部の『齐民要術』と第三部の中国博物学の研究からなっている。

第一部の『南方草木状』の研究』は、中国最古の植物誌『南方草木状』（著作年代未詳）にかんする研究であり、論文にくわえて本邦初の訳注と原書の影印もあわせて収められている。同書は従来、晋の嵇含の撰とされてきたが、著者の考証によれば、その可能性はない。また同書が嵇含の撰と認められるにいたった理由について、明の李時珍の作為的な資料操作がそれをもたらしたことを明らかにしている。

第二部の『齐民要術』の世界』は、中国の代表的な農書『齐民要術』（六世紀）にかんする論考を集めたものである。いずれも著者初期の研究であり、初期の問題関心の所在をよくあらわしている。『齐民要術』が主題とした農業理論にはあまり関心を示さず、同書を博物学や家政学の重要な資料と位置づけ、ユニークな論考をすすめたところに、その特徴がある。

著者の分析結果を命題化してのべれば――、『齐民要術』の設定した樹木と穀物の相関関係（第一論文）や醸造のタブー（第二論文）は、確かに呪術的な色彩をおびているが、

トップページにもどる

相関には相関なりの論理があり、生物相互の関係を生態系としてとらえなおすことができるし、禁忌にも禁忌なりの論理があり、「虫」の存在が禁忌を生んだことを理解しなければならぬ、ということができようであろう。

こうした視点は著者のように農学の基礎訓練を受けた者のみが可能なおところであり、論考には余人の追隨を許さないと多いところが多い。また第三論文は『齐民要術』に書かれた三四〇あまりの食品加工や料理の方法を分析したものであるが、類似の研究の存在を知らない。東アジア食物史研究者にも一読をおすすめしたいところである。

第三部の「中国博物学縦覧」にまとめられた論考は、第一論文の「陸疏の素描」をのぞいていずれも著者後期の作品に属し、著者の研究上の到達点を示している。それは中国哲学と博物学の間に横たわる前人未踏の領域であり、訓詁学者（経学者、儒者）と博物学者（本草学者、道教学者）の視点の相違を明らかにするものにほかならない。

第二論文の「虎豹を食う怪樹の話」は、虎豹を食う怪獣として認知されていた駮（はく）がやがてありふれた樹木であると認知しなおされる過程を論じたものである。著者はいう。「駮とは『詩経』に詠まれている生物だが、漢代以来の経学者はことごとく虎豹を食う猛獣と注釈し、その見解は権威となった。詩の本義にたちかえり、駮は獣ではなく樹木であるという反論があらわれたのは晋代のことである。唐の孔穎達はその反論の妥当性を認めつつも、漢代以来の権威に抵触するという理由で退けた。この論考は、駮をめぐる記述を追いつながら、伝統と権威がいかに博物学の発展を阻害してきたかを明らかにしている」（頁四一七）と。

第三論文の「清朝考証学派の博物学」も同様なトーンか

らなり、『爾雅』釈草篇（前漢に成立）の注釈書を資料として、清朝考証学者の訓詁学的な解釈とその限界に迫っている。「魏・晋より千数百年のち、中国はヨーロッパの自然科学の一部を受容しはじめた。その時代の経学者の動植物観を扱ったものが本論文である。そのなかで、訓詁学という伝統的な手法が、一方では解釈の幅をひろげつつも、一方では博物学の進展を妨げてきたのではないかとの疑問を投げかけている」（頁四一八）。

第四く第六論文は、具体的な昆虫を選んで経学者と本草学者の昆虫観の相違について論じたものである。

第四論文の「経学者の昆虫観」は、蜾蠃（ジガバチ）が対象である。「蜾蠃は『詩経』に詠まれている昆虫だが、漢代の経学者によれば、青虫をもちえり呪文によってわが子に変えるという。以来蜾蠃は教化や徳化の比喩として使われてきた。一方、本草学者は蜾蠃は卵を生むことを観察によつて確認していた。しかし、経学者は一八世紀に至るまで旧説を守った。ここに経学者の昆虫観があらわにされている」（頁四一四）。

第五論文の「魏・晋時代の蟬」は後漢から晋にかけて偏愛された蟬について論じたものである。「晋の陸雲は蟬には清廉の徳があるとして絶賛した。清廉をめぐつて、儒家と道家の評価は異なる。つまり、ある程度評価はするものの、往々にして自己犠牲に収束し社会性を持たないために次善の徳とする儒家と、そこに虚飾を感じとるがゆえに時には揶揄の対象とする道家との対立である。そのような背景をふまえたうえで蟬に託された陸雲の心情と思想に迫っている」（頁四一四）。

著者は中国伝統の経学や訓詁学（伝統や権威といいかえることも可）が博物学の進展を妨げてきたと論断する。そ

トップページにもどる

今月の『東方』

書評目次へ

の理由については、経学や訓詁学が「ものを介さなくても饒舌になれ」、「ものを目の前にしても文献資料の記載内容以上のものを見ようとしなれ」からだという（頁三三二）。また「経学の世界においては、先賢の記述の伝承が第一義」であり、「物の生態を学問として追求する姿勢は経学者にはない。また、かれの学問方法のなかに、観察という方法はない」とのべている（頁三四七）。単純かつ明快な指摘ではあるが、前近代の学問の一面をみごとに摘出することに成功しているとのべてもよいであろう。

小林君の「小動物を媒体にして時代を綴る」という文化史的な研究方法は、間違いなくかれ自身のオリジナルであり、「現代の仙人」と称されたかれでなければ構想しえなかったところであろう。

だが遺稿集を読んで思ったのは、友人を亡くした無念さであり、奇才を失った喪失感ばかりである。

内容批判、方法論批判をしようといういろいろ努力はしたが、著書を開けばただちに苦学生時代の痩せこけたかれの面影が思い浮かび、どうしても理性的になれない。研究者として恥ずかしいかぎりではあるが、いかんともしがた。書評につきものの批判がないことについて、お許しをこいねがうゆえんである。